夜の人影

暗い夜。

弓張提灯をつけて、私は夜風を厭ふ爲めに毛布を恰も供待ちの車夫のやうに體に巻いて、宿の小母さんとして寂しい一つ家を訪ねる。そこにはこの幾十日が間、總ての食料に不便不自由であるこの土地にあって、青い葉や、胡瓜やを快く供給してくれ、この頃はまた栗や茸やを山から採って來て私を喜ばせてくれたお婆さんが、たった一人で住んでゐるのである。

お婆さんはもう六十五になる。けれども編笠を取ると、まだ揃った多い髪の毛は黒く、皺はさすがに深くたゝんでゐるけれども、一寸人柄の好い温容を示してゐる。

お婆さんはこの土地に生れついた人ではなかった。その配偶者が疎水の工事の爲めに、二十年前にこの土地に來てから、やがて其工事は全く出來上っても、幾年か流した汗の愛着は、再び生れ故郷の南部に歸って行かうと其心を急き立てはしなかった。お婆さんは連れて來た四人の子供の外に、猶二人をこの明媚な湖畔の番小屋に生んだ。

娘の一人は土地の小商人に嫁けた。それだのに今何故お婆さんはたった一人で其古びた家に住んでゐなければならないのか？　配偶者には早や既に死に別れたとしても、猶その六人の子供は一體どうしてゐるのだらう？　けれどもその答を直接お婆さんから聞かうとするのは無情である。

私は一度子供を亡くした若い母親の話から、

「お婆さんなんぞも、さういふ悲しい目には随分遇ったでせうね。」と、老人に對する長い間の尊い色々な經驗に敬意を表する心から、何氣なく斯う問ひかけた。

「はあ、度々そんな目に遇ひやした、子供の死んだ話なぞはしたくもねえだし……」

斯う言ってそっと脇を向いて、涙を掌に拭ったのを私は見た事がある。

實際お婆さんはもとからたった一人の身でもあるかのやうに、子供達の事に就ては餘り語らないのであった。語りたくても語られないのであった。六人の子のうち、これはと目を掛けたやうなのは、皆相次いで夭死にをしてしまった。さうして三人だけ殘った。その一人は巡査の家内になって北海道に伴はれて行き、頼みにする一人の息子は、若い時に家を飛び出したまゝ、世にも豪膽な盗賊の一人となって、曾て死刑に擬されたといふやうな噂も傳はった。さうして土地の者に嫁けた娘は、この兄弟故に夫と爭って、これまた今は家を出てゐるのである。母親として其子の名前を口にする時、必ず隱されぬであらう愛情

を、お婆さんはそれ故、人の前に憚らねばならなかった。

この息子の消息に就て、二三日前、お婆さんは常にたった一人心を許してゐる宿の小母さんに、斯う言ったさうである。

先達ての事、土地には見慣れぬ一人の男が、お婆さんの働いてゐた畑の前を通りかゝって、突然お前の息子は達者でゐると告げた。而かも自分が東京を發(た)って來る前の日、立派な服裝(みなり)をして、車に乘って歩いてゐたと、お婆さんは胸が轟くのを覺えた。そして言った。

「それではまだ生きてゐたのがし、とっくに死にでもしたかと思ってたに……」

「あゝ達者でゐるから安心するがいゝよ、お婆さん！」

さう言って男は行きかけた。お婆さんはそれを呼びとめて、何かもっともっと聞きたいと思った。さうして思はず聲をかけた。けれども再び男が振りかへった時には、お婆さんは何となく氣おくれがして、たゞ其男が何所に宿を取ってゐるかを教へて貰ったゞけであった。

察する處、お婆さんは其夜一晩中眠らないでしまった。たゞ達者でゐるといふ其一言の事實で滿足すべきか、將(はた)またもっともっと一時に首を擡げて來る慾望に委せて、あの男の知ってる限りの事を聞きに行かうかと思ひ惑ひながら、翌朝早く、お婆さんは思ひ切って昨日の男を村の宿屋に訪ねて行った。けれどもそれは既に遲かった。男は出發を何處からかの電報に促されて、昨夜のうちに發ってしまってゐた。

「たよりを頼みたいにも、滅多な事を人の前で言はれもしず……」と、其夜の迷ひがまだ殘ってゞも居るやうに、お婆さんは呟いてそっと涙を拭ったさうである。

さて私達は、廣く深いしゝんとした闇の中に、ぼんやりと誘(いざな)ふ提灯の灯に導かれて黒く動いて行った。若しその二つの入り交った足音を止めたならば、道の片手に續く稲田の、穂と穂、葉と葉の風に擦れ合ふ音が、きっと夜の囁きのやうに、しんみりと聴き取れたであらう。往還には全く荷馬車の音も絶え、まだ宵のうちとも思へぬ程、闇は心を籠めてその緘默を守ってゐる。たゞ背後にして來た部落から、夕べの飼葉を促す馬の嘶きが聞えるのが、まだ日も暮れて間もない事を知らしてゐるのであった。

やがて突然に私の歩みは止まる。今迄ぼんやりと足許に動いてゐた灯影が、其時ふと其處に定着したからであった。顔をあげて見ると、夜目にも低い藁葺きの檐が、大きな闇の中に小さく泰然として、而も侘しさうに立ってゐるのであった。

「今晩は――――」

小母さんは重くがたびしする戸に手を掛け、少しく開いたところに横身を入れてぐっと引き開ける。其處は灯影の届かぬ暗い土間であった。この頃少し耳の遠くなって來たお婆さんが、まだその物音を聞きつけぬ間に、小猫は耳聡くも私達の聲を聞きわけて、やにわに白い體を、私達の足許に轉ばして來る。

「お婆さん今晩は――――」

爐には火が燃えてゐた。自在鈎から下げられた大きな鍋は、其火を壓して炎を脇に散らし、小さな洋燈（ランプ）の光を有るか無きかの如くに扱かってゐる。

其傍の板の間に座って、小さなお膳に向ってゐたお婆さんは、今漸く振りかへって私達を認めるや否や、慌てゝお膳を抱へて暗い座敷の方に入ってしまった。そして今度はお膳の代りに、古い花莫蓙の巻いたのを持って來て、爐縁の黒くなった筵の上にそれを擴げるのであった。更にまた私の爲めには、其上に繼ぎはりの薄い座蒲團を敷いてくれるのであった。總ての物は皆古煤けてゐるけれども、それは私に爲された玉座にも等しい歓待である。

お婆さんは私達を其處に座らせて置いて、埃で白くなった板の間に雑巾をかけるやら、爐の鍋を下して煮え上った枝豆をすゝめるやら、かと思ふと今度は大きな西洋南瓜を一つ抱へて來て、俎（まないた）を持ち出してぶつりぶつりと切り始めるのであった。その黄色い身の盛れ上った大きな鍋を再び爐にかけてから、漸くそれで安心したやうに爐端に座って、

「こんな汚ないところに、よく來てくなんしたなっし。」と初めて丁寧にお辭儀をする。私達もそれで漸くお土産に持って來た煙草とお菓子とを差出す機會を得た譯であった。

暖かく燃える焚火を圍んで向ひ合ふのは如何にも親しみの深いものである。殊に其家の隅々が黒く焼け、棚の徳利や瓶（かめ）や、さては一方の隅に押し寄せられた叺（かます）などが、皆一様に爐の火に向って朦朧と顔を向けてゐるのを見れば、如何にもこの秋の一夜の幸福が、この焚火とそれを圍む人々の上に守られてあるやうな感を覺えるのであった。ぽきりぽきりと時折柴は折られ、その爲めに幾度か消えかけた炎は再び燃え上り、寒い寒い冬の夜の追憶談を、さながら今の事のやうな思ひにさせて、行き暮れて戸を叩く人の聲音でも待つかのやうに、幾度か私は戸口の方に耳を傾けるのであった。

「去年の湖水っぷちに倒死（のめ）った人は可哀いさうだったなお婆さん、參宮に行くって連れにたった一人後れてなあ――――今年も亦雪が降るやうになったら、人死にがあんだっぺし、毎年一人や二人は缺かさねえんだからなし。」

檐よりも高く積む雪、小山のやうに行手の道を塞ぐ吹溜り、吹雪の最中にはがばと道に伏して、その猛威の隙を覗(うかが)っては一散に駈け出し、また一時は雪の上に伏すといふ歩き方をして學校に行く子供達、さては立往生をした汽車の中に一夜を饑(うゑ)と寒さとに泣き明かす旅客、冷たい眞白な墓場に生きながらの埋没、さうして凍死――話は盡きる事なく寒い。

その間に、自在鈎にかけられた鍋の中では、漸く南瓜の熱した呟きが始まり、時々泡を吹き出して、自分を押へる鍋蓋を威嚇してゐた。お婆さんはやをら立ち上って、戸棚から古い壺を持ち出し、一つまみの黒砂糖を今宵の珍客の爲めにと、鍋の中に投げ入れるのであった。さうしてから彼女は再び煙管を取り上げて、恰も冬の夜の物語を詠ずるが如く、その追憶を紬(つむ)ぎ紬(つむ)ぎ、ゆったりと或夜の話を語り出すのであった。

それは今から三年ばかり前の冬のことである。お婆さんはたった一人殘った優しい末の息子が、その秋の末のころから煩ひついて、これといふ病み場所もなしに、日に日に痩せ細って行くのであった。旁々その年は、娘を嫁(かたづ)けた小商人が、酒の爲めに家を人手に取られてしまって、夫婦してお婆さんの家に同居してゐたので、家の中が何となくごたごたとしてゐた時であった。

家は例年の如く雪に埋れ、たゞ毎朝毎夕婿の手に依って僅かに入口が開けられた。さうして其處から洩れる煙と灯影とに依って、人は初めて生きてゐる家を發見する事が出來るのであった。

家の中は常に暗かった。其一日の終りが全き暗さを齎(もたら)して、白かった障子に薄墨色の流れを見る時、爐の火は勢ひを増して赤く燃え、夕餉を支度する皿小鉢の音に、彼女等は暫し外の荒涼たる世界を忘れる。婿は午後の汽車で着いた客人の爲めに、橇(そり)を曳いて二三里奥の村に行ったまゝまだ歸らなかった、さうして人聲も馬の嘶きも、遙かなる昔の世界に忘れられたやうになってから久しく、それからは外の道を通る犬の足音すらも聞かれないのであった。

「今晩は……」

突然何處かで言ふ者があった。

刻(きざ)んだ干大根を味噌汁の中に入れようとしてゐたお婆さんは、戸口の方を振り返った。その時五本の凍えた指が戸の縁に掛けられて、戸はその爲めに僅かに身徭ぎをしてゐた。その骨細の白い指は、それを見守ってゐたお婆さんに、直ぐに土地の者でない事を思はせ

た。お婆さんはその戸を中から開けてやる爲めに、一足片脚を下駄の上に下した。その時辛うじて戸が開いて、そして背の高い不思議な男が庭に入って來た。

彼はかへり戸を閉めようともしずに、黙って其處に突立ってゐた。見ると頬冠りをした顔は血の氣もなく白く、たゞ力無くお婆さんの顔を見詰めたまゝ唇を慄はしてゐた。そして猶止めどもなくその手足はぶるぶると慄えてゐた。彼は口も利けないほど凍えてゐたのであった。

それを見て取ったお婆さんは、靜かに手を取って爐端に連れて來ると、呆氣に取られてゐた娘に言ひつけて、大きな飯茶碗に鹽湯を三杯程飲ませ、そして爐の火を一層盛んに焚いた。

さうしてつくづく見ると、彼はこの寒中に單衣物をたった一枚着てゐるだけで、それに股引もない空脛を露はにして、尻はしょりをしてゐるのであった。

鹽湯と焚火とに温められた不思議な男は、それから十分ばかり經つと、やっと自分から口を利き始めた。

「どうも飛んだ御厄介になります――實は私は××鑛山から逃げて來た者です。」

さう言って彼はチラと殆ど本能的に人々の顔を窺った。

「私は生れは三河の者です、家も相當に暮してゐました、今も多分さうでせう、腹異りの弟が後をとってゐるのですがな……實は私は廢嫡になってゐるのです。繼母の爲めに面白くない事があって、私は早くから東京に出てゐました。御承知でせう日本橋の△△っていふ大きな呉服屋を、私はあそこの店員をしてゐたのです。けれども金を費ひ込んでしくぢりました。それからはあっちこっちの外交員なんかをやって見ましたが、少し道樂を始めてゐたものですからうまく行きません、それに自棄(やけ)になればなるほど家からも親類からも構ひつけられなくなって、随分無理な借金もするし、また今になって考へて見れば、私に甲斐性がなかったからですが、随分困りぬきました。そしてたゞ人ばかり怨んでゐました。人を怨んだり怒ったりしてゐられたんだから、その時分は苦しさはまだゆっくりしたもんでした。ぎりぎり結着に窘(いぢ)められると、どうかしてたゞそれを堪えるか遁れるかって事ばかりに苦心しますからなあ。」

彼は段々話してゐるうちにも人心地がついて來るやうに、熱くなった脛(すね)を擦って、その手を膝頭の上に組んだ。

然し彼の聲色は依然として力なく低かった。

「揚句の果てには、」と彼は續けた。

「上野をぶらついてる時に妙な男にあって、そのいゝ加減な口車に乗せられて、こんな山の中にやって來ました。初めの約束では、私は帳付けといふ事でした。ところが來て見るとまるで嘘です、何がなんだもありません、殴られまいとするにはたゞ黙って何でもやらなければならないのです。今まで持った事もないやうな道具を掴んで、朝から晩まで追ひ使はれるんですから、それも當り前の仕事なら、私だって男ですから、辛棒の出來ない事もありますまいが、何しろひどいもんです。無茶です。それもどうやらかうやら仕事の出來たうちはまだいゝです、雪が降るやうになってからは仕事は出來ず、出來ないから猶更當てがひが惡くなって來ます。この寒中に火の氣一つないところで、着のみ着のまゝでごろごろしてなければならないのです。歸りたいって言ったって滿足に歸されもしず、歸られもしないのですから、もう途中で斃れ死にしてもと思って、兎に角逃げ出しました。今日でもう三日になるやうです。村に出てからは彼方此方のお世話になって、不思議にこゝまで生きてやって來ました。けれども私はまるで夢中でした。何時夜が明けて日が暮れたのか、何處をどの位歩いたのか、私の頭はたゞぼんやりとしてゐました。何だか氣が遠くなったやうな氣がして、時々氣が付いて見ると、私は雪の中をぼんやり立ってゐるのです。それからたゞ是れではならないと思って歩き出しました。そしてふと側を見ると、こゝの家の戸から灯がさしてゐたので、私は急に元氣づいて、それと同時に、またがっかりしたやうな氣がしました。……」

その話のうちに、夕餉の支度はすっかり出來上った。けれどもまだ婿は歸って來なかった。お婆さんはその男の爲めにも、山盛りに盛った御飯と暖かな味噌汁とを用意してやった。けれども彼は、

「御飯はほしくありません。」と言って、さも疲れて、ひたすらにたゞ眠る事を欲するものゝやうに力なく額を押へた。

「いやいや斯ういふ時に腹を空かしてゝは却って寒いもんだし、さあさあ熱いところで腹を拵へなくちゃ。」とお婆さんはなかなか承知しさうもなかったので、彼は黙って會釋をしつゝ御茶碗に手をかけた。その手は幾分か顫えてゐた。

彼が夕餉を辭退したのは、全く遠慮からではないやうであった。さぞ餓えて詰め込むだらうと思ひの外、漸く二椀の飯をかへたゞけであった。

お婆さんは實に先刻から心を痛めてゐた。この男は疲れてゐる。一夜を此家に泊めてやるに越した事はないが、彼女は何となく婿の心を計りかねたのであった。若し歸って來てからぐずぐず言はれるやうでは、却ってお互に氣拙い思ひをしなければならない。それよ

りもまだ今のうちならば、何處にか宿の取れぬ事もなからう――――さう思案して、何か着せてやる物を探しに納戸の方へ立って行った。

「お母さ、お母さ！」

今まで眠ってゐるとばかり思ってゐた息子が、此時首を擡げて、頻りに古葛籠を探ってゐる母親の手許をぢっと見入りながら言った。

「あの人を泊めてやらっせ、お母さ、可哀そうだから泊めてやらっせ、なんぼ切ねんだか知れねんだからな。」と、恰も自分の身の事のやうに病人は嘆願するのであった。

お婆さんは心が動いた。けれども亦ふと婿の顔を思ひ出すと、古襯衣や股引のやうなものを引出しながら言った。

「あゝ、お父つあが生きてる時ならなあ、お父つあもさういふ事してやるのが大好きだった。然し、なあ新吾、兄(あに)にやさが歸って來て、なんと言ふか分んねえからなあ。」

かくて男は再びこの家を出て行かなければならなかった。お婆さんは娘に支度をして、駐在所までこの人を送り届けるやうに言ひつけた。

これらの話が母娘の間に取り交されてゐる間中、彼は膝頭を抱いてぼんやりと火の燃えるのを見詰めてゐた。彼は如何にも其處から立ち上がるのが厭さうであった。けれども此處に留まってゐたいと言ひ張る權利はないとでも思ったやうに、やがて黙って立ち上がって支度を始めた。釦の取れた襯衣や、所々破けた股引や、それでも初めよりは多少防寒の用意が出來たのを、お婆さんはせめて滿足さうに眺めながら、草鞋を手傳って履かせてやった。

「どうもお厄介になりました。」

彼は寂しい顔をして、殘り惜しさうに焚火を一瞥しながらお婆さんに會釋をした。

二人がおもてに出た時、雪は全く降りやんでゐたけれど、待ち構へたやうに鋭い風は其處らの雪をさらって、顔と言はず、裾と言はずに、吹き上げ吹き下すのであった。娘は先に立ってまづ雪の中にその體を埋めた。そして恰も深瀬を泳ぐやうに胸で雪を押しつゝ、眞直ぐに目を配って突き進んで行った。若し雪のない時ならば、駐在所までは、ほんの一走りといってもいゝ位な所なのだけれど、そこに行き着くまでに、二人はかなり努力をしなければならなかった。

駐在所には生憎巡査が不在であった。その爲めに更に二三丁ほど奥へ、村の區長の家へと娘は案内した。二人は時々ものに躓いて倒れようとしたり、恐ろしい勢で吹き下して來る山風に息が止まりさうになって立ち止まったりした。けれどもさうした難儀な道中も何

の甲斐はなかった。村で分限者とされてゐるにも拘らず、區長の家では主人が不在だからといふ口實の下に、この怪しい、併しながら哀れな旅人の爲めに、そり庇を貸さうとは言はなかった。

娘は途方に暮れた。そしてたゞ何處までも黙って自分に蹤いて來る男の爲めに氣の毒がると共に、一刻も早く自分の家に逃げて歸りたいやうな氣がするのであった。雪に慣れ、寒さに慣れた者にも猶、此上當てもなく雪の中をさまよはなければならぬのは辛かった。彼女も遂に彼を見捨てた。そして、も一つ先の部落の區長の家を教へて、彼が詮方なく最後の力を揮って歩き出すのを見るや否や、彼女も亦逃げるやうに、家の方へと雪の中を急いだ。

暫くして振り返って見ると、最早や人らしい動いて行く者は何處にもなく、はつとして耳を聳てゝ見ても、たゞ山下しの叫びと、自分の息吹きの音より外には、生ける者の聲を聞き取る事は出來なかった。薄い闇の下に、大地はたゞ白皚々と積んだ雪に輝き、森嚴な自然の前に、何事かを待ち受けてゐるやうであった。

「まあそれから其人はどうしたでせうね。」と私はいきなり言葉を挾んだ。

お婆さんはこの時一先づ話を切って、煮えた南瓜を小皿に盛り、それを私の前に置いて、塗箸を添へてゐた。

「はあ、其處の區長さんとこでは、丁度みんなで飯(まま)を喰べてゐたところだったさうだがなっし、(今晩は！) といふ聲がするので戸を開けて見ると、外に立ってゐた男が一足家の中に入ったと思ったら、ばったりと倒れてしまったさうでやした。」

「死んぢまったの？」

「いや、たゞ気絶したらしいんだなし、其處の區長さんは貧乏こそしたげっと、深切な人達だったもんだから、なんでも弱ってるからって、二三日泊めてやったやうな話だったなっし。」

私は溜息をついて、身を搖がした。

氣がついて見ると、今はまだ初秋の一夜ではあるけれど、如何にも冬の夜の物語にふさはしく、焚火は猶盛んに燃えてゐる。そして何時の間にか小猫は柔かな暖か味を敷いて、私の膝の上に可愛く丸くなって眠ってゐた。

間もなく私達は一つ家の爐べらを辭した。

私は、若し生きてさへゐたら――――この言葉は私に取って決して無意味ではない――――と來年の夏の再會を約して、お婆さんに暇乞ひを述べた。

その時には、この無邪氣な小猫も最早父となってゐるであらう、さらばさらばと私はその背をも撫でゝやった。

戸の外に出て、仰げば天の川は空に高く、一つ家を圍む叢に虫が鳴いてゐた。湖ももう眠りに就いたであらう、耳を傾けて暫く息をひそめても、波の音は聞えず、たゞ何處までも夜は靜かである。私はうしろを一度振り返って、見廻して、そして歩き出した。

【入力者注】　以下の修正を行いました。

耳聴くも　→　耳聡くも

一足方脚　→　一足片脚

底本：「水野仙子全集」第四巻
初出：「大学及び大学生」大正七年六月
テキスト入力：小林　徹
公開：平成三十年一月二十七日
修正：令和三年九月二十八日
リンク：水野仙子ホームページ